ガンダーラ仏教彫刻における生天思想の造形
―従三十三天降下図を中心に―

田辺　理（早稲田大学）

ガンダーラの仏教彫刻には、酒宴、奏楽、性愛、アクロバットなど非仏教的と考えられうる彫刻が存在する。これらの彫刻は従来、仏教と関係のない単なる建築装飾や世俗画などと考えられてきた。しかしながら、発表者は仏教的な内容をもたないものが、仏教寺院に飾られる可能性は極めて少ないと考えて考究した結果、在家仏教徒が願っていた生天思想の観点からこれらの図像の意味を考えるべきであるという結論に達した。そこで本発表では、生天思想に関係の深い三十三天に直接関係している釈尊の従三十三天降下を描写した図像をとりあげて考察し、ガンダーラの仏教彫刻における生天思想の造形化の一例を論証することを目的とする。

従三十三天降下とは、釈尊が三ヶ月間三十三天（忉利天）に昇り、そこに再生していた母親の摩耶夫人に説法をした後、三筋の金石製の階段（三道宝階：中央が金、右が銀、左が瑠璃など）を通って、地上（サンカーシュヤ）に降下する挿話をいう。

三十三天は、須弥山の頂上にあり、三十三の天神が住んでいる。特に三十三天中の第一人者である帝釈天＝インドラの歓喜園と呼ばれる楽園が重要である。その楽園は大変楽しく、美しい所で、大樹が並び、非常に香りのよい花が咲き、天女（アプサラス）が住んでいる。仏典『端正なるナンダ（Saundarānanda）』では、釈尊が異母兄弟の難陀を三十三天に連れて行き、そこに住む美しい天女を見せ、そこに再生すれば、彼女たちと交歓できると説く。インドのサーンチーやバールフットの彫刻に表現された三十三天の歓喜園図などでは、男女が飲酒・饗宴・交歓する場面を表現している。以上のことから、三十三天は、男女の飲酒・饗宴・交歓図などによって象徴される特色を有することが判明する。

一方、ガンダーラのザールデーリーから発掘された従三十三天降下図を見ると、釈尊が降下する階段を表現した彫刻の外枠に、男女の飲酒・饗宴・交歓の場面が連続的に描写されている。この図像は上述した三十三天の悦楽を簡略化、集約して描写したものであると考えられる。また、このような世俗的な外観を示す彫刻には、ディオニューソス神信仰に由来する悦楽的図像を借用して描写したものが多い。しかしながら、上記のザールデーリーの彫刻は、ディオニューソス神やその眷属（メナド、サチュロスなど）の悦楽的図像を借用しているが、その信仰そのものを表現したものではなく、三十三天などの天界に死後復活再生した生天者とアプサラスなどの天女との飲酒・饗宴・交歓などを表現したものであると解釈するのが妥当である。

以上の考察結果から、ガンダーラの飲酒・饗宴・交歓図彫刻は、単なる建築装飾でも世俗画でもなく、天界を代表する三十三天の特色を造形化した実に仏教的な作品に他ならないと結論できるのである。